

仏心と葬弁儀 ーその6ー

悲嘆に茫然自失の日々

札幌で火葬するのは、飛田には忍びないものでした。「秀巳、一緒にうちに帰ろうな」と、病院の厚意で車を用意してもらい、冷たくなった我が子をしっかりと抱きかかえながら親子三人、肩を寄せあうようにして釧路へと戻ってきたのでした。

家へ帰ってからも、あまりに突然だった悪夢のような出来事に、飛田夫婦は呆然としていました。「去年、母を亡くしたばかりなのに、たった一年足らずのうちに四人家族が、夫婦二人きりになってしまいました」と飛田は述懐します。その悲しさや寂しさは、他人にも容易に想像できる大きなものであったと思います。茫然自失の飛田は、勤めに向かう気力も起きませんでした。

わが子を失う母親の思い

母子家庭に育った飛田は、貧しくても負けまいと、修学旅行の費用を納豆売りをするなどして自分で工面したほか、自転車欲しかった時には母親に「学校のマラソン大会で一

等になったら買ってほしい」と告げるや、毎日懸命にトレーニングを続け、本当に優勝してしまふような少年時代を過ごしました。そんな飛田でも、この時ばかりは「本当に参った」と話します。男の飛田にしてこうなのですから、ましてや自分が腹を痛めた、初めての子供を突然奪われた芳栄夫人の落胆ぶりは、はた目にも痛々しいほどのものでした。まさに何をする気も起こらなくなり、まるで病人のように寝込んでしまったのです。

「それでも家の外で小さな子供の声が聞こえたりすると、秀巳が戻ってきたんじゃないかと、夢中で飛び出していったこともありました」と芳栄夫人。

その後、新たに一男一女に恵まれてからも、飛田夫妻の悲しみは薄れることはあっても、決して消え去ることとはなく、子供たちのためにと買ってきたお菓子やご馳走などは、まず最初に秀巳の仏壇に供えてから、みんなで分け合って食べるというのが、長く飛田家の習慣となっていました。

ー つづく ー

■ 次回の掲載は二月二十日(土)を予定しております。